

令和8年度愛鳥週間ポスターコンクール 審査講評

小学校 20 校、中学校 19 校、高校 7 校から 135 点が出品されました。小学生の作品では、描きたい野鳥のいる場面を大胆にとらえながら、一枚一枚の羽の形や色彩をじっくりと見つめて描いたことが感じ取られました。なかでも、山形県知事賞では、花の蜜を吸うためにくちばしを近づけているメジロの姿を、愛らしく表現していました。桜のピンクと、メジロの鮮やかな黄緑色のコントラストで春の息吹を感じさせる画面になっていました。

中学・高校生の作品は、表現レベルが高まり、背景描写へのこだわりも感じられました。水辺から飛び立つ感じや疾走感が表現されており、野鳥が自然の中でいきいきと暮らしている姿が感じ取られました。中学生の環境省東北環境局長賞では、ワシが羽を広げている姿を、あえて画面からはみ出した構図で多彩な色を使って描いていました。猛禽類特有の強い存在感や迫力をさらに強調しています。高校生の山形県教育委員会教育長賞では、カワセミが魚を捕らえて誇らしげな姿を描いていました。カワセミの鮮やかで多様な青色と橙色が美しさと存在感を強調しています。どの作品も野鳥を細かいところまで観察して描かれており、制作者のこだわりを感じました。背景の表現を大切にした作品も多く、野鳥が自然の中でたくましく生きている姿や臨場感がよく表現されていました。

この愛鳥週間ポスターコンクールのねらいは、制作過程を通じて野生鳥類の保護思想を高めることです。私は、本審査会をきっかけに、野鳥について興味が湧き、インターネットや書籍で野鳥についての記事や写真を見るようになりました。日本野鳥の会山形県支部のホームページのなかに、「鳥をたのしむこと＝鳥を守ること」という言葉を見つけました。今回描いた野鳥は、制作者にとって特別な存在になったはずです。自分事としての深い理解が野鳥を守ること、さらには野鳥の生きる自然を守ることにつながると思います。今回の審査では、専門家の視点からの様々な意見をお聞きして、その野鳥を本当の意味で理解して表現している作品が評価されました。図鑑を見てその形や色彩の美しさに目を向けることはもちろん、生息地や活動している季節、巣の形、群れで行動するのかなど、その生態をよく知ること大切ではないでしょうか。野鳥をよく知ることによって表現がより良いものになり、生命感までも表現できるのだと思います。

今回の審査全体を通じて、制作者の野鳥へ向ける温かな眼差しと鋭い観察力が作品から感じられました。描いたことで、野鳥や自然に対する愛情の芽が生まれたと思います。自分で描いたような美しい自然の中で野鳥やその他の生き物がいきいきと生きられるように、そんな豊かな自然を守り、自然を含めた社会全体を、大切にしてほしいと思います。